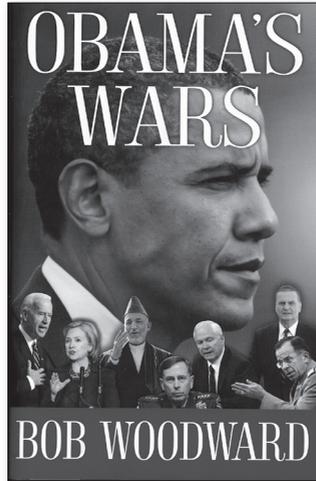


選評

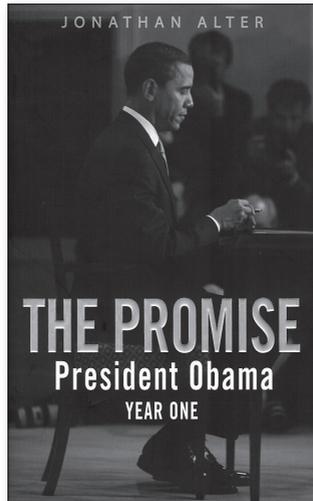
東京大学先端科学技術研究センター准教授

池内恵

# 将軍たちは前回の戦争を 準備する



Bob Woodward, *Obama's Wars*, Simon & Schuster, 2010.9.



Jonathan Alter, *The Promise: President Obama, Year One*, Simon & Schuster, 2010

オバマ政権についての「ウッドワード本」が早くも出版された。ウッドワードの執筆のスピードはいつそう早まっているようだ。ブッシュ政権の8年間については、4冊が出版

された。『*Bush at War*』(2003年、邦訳『ブッシュの戦争』、『*Plan of Attack*』(2004年、邦訳『攻撃計画』、『*State of Denial: Bush at War, Part III*』(2006年、邦訳『ブッシュのホワイトハ

ウス』2007年、いずれも日本経済新聞社)、それに『*The War Within: A Secret White House History 2006-2008*』(2008年、未邦訳)。本書『オバマの戦争』は、当選か

ら政権初年度の末までを中心に扱う。前半部では、映画「七人の侍」のように、政治任命でオバマ政権に登用された高官が、打診の連絡を受け、順に登場する。

Obama's Wars という複数形のタイトルからは、対イラク政策や、あるいはイラン問題についても扱われているものと想像されるのだが、実際には対アフガニスタン政策のみが描かれる。中でも2009年12月1日に発表された、対アフガニスタン増派政策を決定する過程に、叙述の焦点は絞られている。それではなぜwar が複数形なのだろうか。おそらく、アフガニスタン政策の策定に当たっての政権内部での「戦争」が、2009年を通じて幾度も繰り返し広げられてきたという意味なのだろう。

その意味で、『オバマの戦争』は前作 *The War Within* (『ブッシュ政権

内なる戦争』と訳せる) の続編と見ることできる。共和党が2006年に2期目の中間選挙で敗れた後、ブッシュ大統領が政権内外の懐疑的な意見を押し切って「大幅増派 (surge)」に踏み切った過程が、『ブッシュ政権 内なる戦争』では描かれていた。本作では、アフガニスタンとパキスタンでの紛争を「オバマの戦争」として受け止める過程での「内なる戦争」が主要なテーマとなる。大統領ら「文民」と、国防総省の制服組幹部との齟齬・軋轢というテーマも共通であり、「大幅増派」の実施を担って名を上げたペトレイアス将軍らが、前作に続いて登場する。

しかし、評価の軸は前作と本作で大きくずれている。ウッドワードは前作では、ブッシュ大統領のイラクへの「大幅増派」の意思決定を、かなり好意的に描いていた。ところが本作『オバマの戦争』では、評価の軸が一部反転している。前作では大胆・果敢な作戦を考案してブッシュ大統領の評価を得て、イラクでの作戦の実施で成果をあげたペトレイアス将軍らが英雄視されたのに対し、『オバマの戦争』ではその将軍たちがアフガニスタンにも同様に大規模の増派を要求して譲らず、オバマ大統領やバイデン副大統領と対立する様子が、オバマ側に好意的な視点で描かれる。

「将軍たちは、次の戦争ではなく、前回の戦争の準備をする」という言

い習わしがあるが、ウッドワードの描写はまさにこれを思い起こさせる。ブッシュ政権のイラク増派の成功で、軍内部での勢力を確固たるものにしたペトレイアス將軍とその一派が、オバマ政権のアフガニスタン政策では同様の増派作戦に固執して、大統領の意思に逆らう勢力と化した、という見立てである。

傷病兵の慰問でほとんど「神がかり」のエピソードを演出して報じさせ、政界進出の野心をみなぎらせるペトレイアス將軍や、リークやあからさまな独走発言で大統領の政策判断をあらかじめ制約しようとするマクリスタル將軍（駐アフガニスタン・NATO軍司令官・当時）が、今回は「悪者」として描かれる。軍幹部に対する評価が反転してい

るといつても、ウッドワードは前作と同じストーリーを描いているとも言える。軍人の独走を抑え、文民の大統領が最後は統制するというストーリーであり、アメリカ民主主義の理念が顕現する瞬間に、多くのアメリカ人読者が共感するのだろう。

ウッドワードは、ホワイトハウスのシチュエーション・ルームで練り返し行われたアフガニスタン政策の討議を、まるでそこに居合わせたかのような、いつもの筆致で描写する。その際に、政権内部の諸勢力がメディアを用いて世論を有利に導こうとするテクニクを明かしているところが興味深い。国防総省がまとめた「マクリスタル報告書」（8月31日付）は、大幅な増派なしにアフガニスタン情勢の好転は望めないと結論

づけたが、これは即座にメディアにリークされ、オバマ大統領の「長引く決断」を責める論調に力を与えた。しかしこれに対抗する側も黙っていない。9月2日付の『ワシントン・ポスト』に掲載された、デービッド・イグナチウスのコラムは、アフガニスタンへの増派がオバマにとつて「ベトナム」になると警告した。これは軍に対する牽制（けんせい）と見られた。これを読んだペトレイアス將軍は早速『ワシントン・ポスト』の別のコラムニストであるマイケル・ガーンソンに電話をかけ、反論を流す。ガーンソンはブッシュ大統領のスピーチライターの9・11事件後の対外強硬策の演説起草に関与したという。オバマと將軍たちの決定的な「対決」は、象徴的にも11月11日の「退

役軍人記念日 (Veterans Day)」に起こったという。この日のアフガニスタン政策再検討の会議(8回目だという)に、オバマは遅れて入ってくる。オバマは「遅れてすまない。私たちが今何をやっているか、『ウォール・ストリート・ジャーナル』で読むので忙しかったのでね」と皮肉で口火を切った。その日の『ウォール・ストリート・ジャーナル』で、大統領は3万〜3万5000人の増派の判断を迫られていると報じられ、軍の要求を既成事実化するリークと見られた。軍上層部からの政策案のプレゼンテーションに対し、オバマは正面から異議をつける。示された四つの選択肢のうち、二つは明らかに現実的ではない。残りの二つは実質上ほとんど変わりがない。つまり軍

が大統領に与えた選択肢はただ一つではないか、と。ここから大きく政策論は展開し、12月1日に発表された、軍の要求する増派は認めつつも、2011年7月までに成否を判定するということ、出口戦略をより明確にした政策発表につながる。2009年3月の時点でのオバマの認識は「世論が私にアフガニスタン問題で与えてくれる時間は2年間しかない」というものであった。オバマの政治判断と、軍の専門家集団としての作戦遂行能力の認識との妥協点が、アフガニスタン政策に結実した。ウッドワードはどこまでも細かいディテールに拘泥する。例えば、ジョーンズ国家安全保障担当補佐官は「身長6フィート5インチ」で、「よく手入れの行き届いた髪型、長い

男らしく整った顔立ち、明るく澄んだ青い目、少年のような笑顔、柔らかな物腰、まるで海兵隊の案内パンフレットから出てきたような人物」ということになる。こういった細部に渡る描写が、政治現象としてのホワイトハウスを描くためにどれだけ有益なのかは分からないが、少なくともウッドワードがそれらの人物に「肉薄している」ことは示しているのだろう。

オバマ政権の内政・外交を含めた政策決定過程を、より分析・批評的に見ていくには、ジョナサン・オルター『約束——オバマ大統領の第一年』と併せて読むとよい。両書から、オバマ政権の内政・外交の総合的な視野が得られるだろう。

(いけうちさとし)